世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『悲しいメイポール祭』

第 18 話

制 作　日本アニメーション
　　　　フ ジ テ レ ビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第十八話「悲しいメイポール祭」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード

モリー
ジェームス
ドナルド
ジャネット
母親
○
エミリー（人形）
シーザー（猫）

1 ミンチン女学院・屋根の上（払暁）

── まだ暗さの残るスカイライン。

── 群がり降りて来るすずめたち、セーラを呼び起すように、天窓でさえずり出す。

2 同・屋根裏部屋（払暁）

眠っていたセーラ、眼を醒まし、半身起して、天窓を見上げる。

× × ×

── 天窓に、すずめたちのさえずる影。

× × ×

セーラ「（微笑）すずめさんたち、起してくれてありがとう」

ふと、隣りの壁に気づく。

セーラ「さ、ベッキーにも声をかけてあげなくては……」
セーラ、そっと隣室の壁を叩く。

3 同・ベッキーの部屋（払暁）

ベッドで昏々と眠っていたベッキーが、壁のノックに、弾かれたように半身はね起きる。
ベッキー「は、はい、院長先生、ただいま……」
怪訝に見廻して、現実に気づく。
ベッキー「なんだァ、夢かあ……あああ、起きて損しちゃった！」
トロンとまた毛布の中にもぐり込む。

4 同・屋根裏部屋（払暁）

聞いていたセーラ、思わずクスッと笑い隣室に改めて、

声とノック——

セーラ「ベッキー……起きる時間よ」

5

同・ベッキーの部屋（払暁）

再び、ガバとはね起きるベッキー。

ベッキー「は、はい、お嬢様……」

はっと天窓を見上げ……

ベッキー「あ、いけない、もう朝……」

慌てて隣室の壁を三度叩きながら、

ベッキー「はいはい、お嬢様、もうとうに起きておりますです。すぐにお迎えに参りますから……はい……」

6

同・屋根裏部屋（朝）

思わず肩をすくめて微笑するセーラ。

7 同・三階の廊下（払暁）

扉が開き、屋根裏階段から出て来るセーラとベッキー、はっと立停る。

× × ×

まだ仄暗い廊下に、手燭を持ったアメリアが自室から出て来ると階下へ急ぐ。

× × ×

セーラ「どうしたのかしら、こんな朝早く」

8 同・二階の廊下（払暁）

降りて来たアメリア、次々に女生徒たちの部屋をノック

して行く。

アメリア「皆さん、お時間よ、起きて下さい」

9 同・ロッティの部屋（払暁）

まっ先に起きるロッティ――

ロッティ「さ、みんな、起きて！」

10 同・アーメンガードの部屋（払暁）

早くも着換えをしているラビニアとガートルード、ジェシー、声をかける。

ラビニア「アーメンガード、早く起きないと置いてくわよ」

ガートルード「あんただけ、美人になりたくないなら、寝てるといいわ」

三人、飛び出して行く――

アーメンガード「あ、待ってよォ」

慌ててモソモソと起き出す――

11 同・表（朝）

玄関から出て来るアメリア、ラビニア、ジェシー、ガートルード、ロッティ以下の女生徒たち、慌ただしく通りを渡り、スクエアの中へ急ぐ。

×　×　×

点燈夫が、ガス燈を消して行く――

×　×　×

遅れて出て来たアーメンガード、急いでスクエアへ走る――

×　×　×

地階から出て来たベッキーが、使用人階段を駆け上り、
スクエアを見る。
ベッキー「まあ……（階下を振向き呼ぶ）お嬢様……お嬢様……」
地階から怪訝そうに顔を出すセーラ。
セーラ「どうしたの、ベッキー」
階段を上って来るとスクエアを見る。
セーラ「まあ……みんな、なにをしているのかしら」

12 同・スクエア広場の中（朝）

朝もやの中で、登り初めた朝日に思い思いに眼を閉じた
顔を向け、光を受けているラビニア、ジェシー、ガート
ルード、女生徒たちの姿——

13 同・使用人階段の上（朝）

ベッキー「そうそう、今日は『五月の朝露（メイ・デュー）』の日だったんですわ」
セーラ「え、『五月の朝露（メイ・デュー）』の日？」
ベッキー「ええ。お嬢様はずっとインドでお育ちですから、御存知ないかも知れませんけど、イギリスでは、一年で今日一日だけ魔法の朝露が降りて来て、それを顔に浴びると、そのあと一年間は美人でいられるって云われているんです」
セーラ「まあ……」
ベッキー「（見て）わァ、アメリア先生まで」

14 同・スクエア広場の中（朝）

女生徒たちの中で、眼を閉じて顔に朝露を浴びようとしているアメリア――
その傍で、手鏡で自分の顔を確かめては、また眼を閉じて朝露を受けるアーメンガード――

更に一方で、草の葉に宿った朝露を小さな瓶に集めているロッティの姿――

15 同

セーラ「（微笑）まあ、ロッティまで……」

顔を見合わせて笑うセーラとベッキー。

その時、地階から出て来るモリー、階段上のセーラとベッキーを見て眉をつり上げる――

モリー「まあ、なにをしてるかと思ったら、また仕事をずるけてたんだね」

セーラ「あ、すみません、モリーさん」

セーラとベッキー、急いで階段を下へ。

16 同・地下の食堂

テーブルに、皿や食器を並べているセーラとベッキー。トーストの大篭とスープの大鍋を抱えたモリーとジェームスが入って来る。

モリー「さあさあ、今日は生徒さんたちのもよおしがあって忙がしいんだからね」

ジェームス「そうよ。院長先生にメイポールを建てるように云われてるしな」

セーラ「あの、メイポールって?」

ジェームス「屋根裏の物置にある。ベッキーと二人で運んで来るんだ」

セーラ「は、はい、ジェームスさん」

17

同・屋根裏部屋前の廊下

階段を上って来るセーラとベッキー、一方の物置部屋のドアに行くと、開ける。

18

同・物置部屋の中

入って来て見廻すセーラとベッキー。

机や椅子、ガラクタの中に——ホコリをかぶって転っている黄と黒のシマ（床屋の看板風）に塗り分けた三米余の丸太。

セーラ「あれかしら？」

ベッキー「あ、あれです。私の村でも、よく広場にあのメイポールを建てて五月のお祝いをしました」

セーラ「まあ、楽しそうね……さ、運びましょう」

ベッキー「はい、お嬢様……」

二人、丸太に行くと、重そうに持上げる。

——舞い上るホコリ。

19

同・地下の食堂

ミンチン「と云う訳で、これから前の広場で五月のお祭りを開く事に致します」

食事中の女生徒たち、わっと歓声――

ミンチン「静かに……」

女生徒たち、静まる――

ミンチン「それから、もうひとつ……今日は『五月の女王様』メイクインを皆さんの中から択び出す事にします。誰が択ばれるかは、お楽しみに……」

ざわめく女生徒たちの中で、自信たっぷりにジェシーたちに鼻を高くするラビニア――

20

同・スクエア広場の中

埋立てられたメイポールに梯子をかけ、先端を飾ったサンザシの花枝の芯に十数本のリボンを結びつけているア

メリアと、梯子の中段でリボンを渡すセーラ、その下で渡すベッキー。その梯子をジェームスが支えている。

21 同・玄関前

歓声と共に飛び出して来る女生徒たち。

22 同・スクエア広場の中

わっと駆け寄って来る女生徒たち。

アメリア「さ、これで出来上りですよ」

『わァ、素敵』と歓声をあげる女生徒達

セーラ、アメリア、梯子を降りる。

そこへ遅れたアーメンガードとロッティが駆け寄って来る。

アーメンガード「セーラ……！」
ロッティ「セーラ・ママ……！」
セーラ「あ、アーメンガードにロッティ、お早う」
アーメンガード「お早う」
ロッティ「お早う……あのね、セーラ・ママ、私たち、今朝すごく早く起きて、魔法の朝露を浴びたのよ」
セーラ「（微笑）まあ……」
ロッティ「ね、私、きれいになった？」
セーラ「（微笑）なったわ、とてもきれいよ、ロッティ」
ロッティ「うわあィ！」

傍で吹き出すラビニア、ジェシー、ガートルード。

ガートルード「ロッティ、あんたがきれいになんてなる訳ないじゃないの」
ロッティ「なによ、失礼だわ……アーメンガードだって、魔法の朝露をあびたのよ。ねえ、アーメンガード」

アーメンガード「え、ええ……」

また、どっと笑うラビニアたち。

ジェシー「アーメンガードなんて、もっと利きめがある筈がないわ」

ガートルード「そうよ、もとがもとですもんねえ」

笑うラビニア、ジェシー、ガートルード。

うつむくアーメンガードと、怒りを押えるセーラ。憤然となるロッティ、ふと例の小さな小瓶を出すと、セーラに差し出す。

ロッティ「ね、セーラ・ママ……これ、私がママにとっておいてあげたの」

セーラ「え……」

ロッティ「魔法の朝露よ……だって、セーラママは、きっと仕事で朝露を浴びに来られないと思ったの」

セーラ「まあ……有難う。ロッティ」

ラビニアたち、また笑う

ラビニア「ロッティ、そんな事してあげても無駄じゃなくて？……だって、セーラは、どうせ一日中、台所で顔をまっ黒にして働くんですもの」

どっと笑うジェシー、ガートルード。

ロッティ「（泣顔）ひ、ひどいわ。セーラ、ママにそんな事云うなんて」

セーラ「ロッティ……」

セーラ、怒りを押えてロッティをかばう。

口を挟めずオロオロしていたアメリアが、一方を見て、

アメリア「セ、セーラさん……」

セーラ、はっとその方を見る――

広場の中を―― スカートを摑み上げて一直線にセーラに近づいて来るミンチン。

ミンチン「セーラ……！」

セーラ「は、はい、院長先生」

ミンチン「またお前は、生徒たちの中へ入り込んで！……今日のお祭りは、お前の為のお祭りではありませんよ」

セーラ「す、すみません、院長先生」

ミンチン「ジェームス……早くこの二人を連れて行って仕事をさせるんです」

ジェームス「へえ、院長先生……さ、来るんだ」

スコップを担いで、セーラとベッキーを促す。セーラとベッキー、仕方なく梯子の前後を持つとジェームスに続く。

冷笑で見送るラビニア、ジェシー、ガートルードと心配そうに見送るアーメンガード、泣き顔のロッティ。

ミンチン「アメリア、お祭りの支度は終ったのですね」

アメリア「あ、はい、お姉様……」

アメリア、慌てて生徒たちに呼びかける。

アメリア「さ、ラビニアさん、皆さんにお手伝いさせて、遊戯室から

オルガンを運んで下さらない」

ラビニア「はい、アメリア先生……」

――歓声をあげる女生徒。

――ミンチン、満足気に微笑で頷く。

（中　C　M）

23 スクエア広場の全景

オルガン曲（モーツアルトの『五月の歌』）が流れ、メイポールを囲む女生徒たちの姿が見える――

24 ミンチン女学院・地下の洗い場

セーラとベッキーが、食器を洗っている。
モリーがつかつかと入って来る。

モリー「さあさあ、なにをいつまで同じことやってるんだよ。ベッキー、お前は、洗い物が終ったら、教室の掃除だよ」
ベッキー「は、はい、モリーさん」
モリー「セーラ、お前には市場に買物に行って貰うからね」
セーラ「はい、モリーさん……」
モリー、行こうとする。

セーラ「でも、あの……」

モリー、ジロリと振り返る。

モリー「なんだね」
セーラ「あの、今日は朝からずっと忙がしくて、私も、ベッキーも、まだ食事を頂くヒマがなかったんです」
モリー「おや、そうだったかねえ」

ベッキー、脅えながらも頷く。

セーラ「それで、あとの仕事は、なにか少し頂いてからではいけないでしょうか」
モリー「なんだって？　この忙しいのに、お腹がすいた位で、仕事をあと廻しにしようってのかい」
セーラ「でも……」

ベッキーが慌てて出る。

ベッキー「お嬢様……」

セーラに代ってモリーに訴える。

ベッキー「あの、私は、我慢するつもりでございます……でも、重い買物に行かれるお嬢様、いえ、セーラ様は、なにか食べなくては、お気の毒です」

モリー「お黙り……そんなに食べたきゃ、早く仕事を片附けときゃいいのさ。忙しいのはお互い様なんだからね」

モリー、出て行く。

撫然と顔を見合せるセーラとベッキー。

ベッキー「お嬢様……」

セーラ「仕方がないわ……ベッキー、我慢しましょう」

ベッキー「ええ……でも……」

ベッキー、吐息してうつむく。

ベッキー「おなか……すきましたよね……」

セーラ「ベッキー……」

ベッキー、セーラに顔をあげ、悲しそうに頷いてみせる。

ベッキー「我慢しますとも……お嬢様さえ我慢してらっしゃるんです

もの……」

セーラ「ベッキー……」

セーラ、そっとベッキーの手をとる。

25 同・表

買物篭を手に、地下の出入口から出て来るセーラ、ふっと顔をあげる。

――聞えて来る『五月祭』のオルガン。

セーラ、地上への階段を昇りはじめる。

――オルガン曲が次第に拡大して、

26 スクエア広場の中

運び込まれたオルガンを、嬉しそうに弾き続けるアメリ

27

スクエア脇の道

アーー

× × ×

立てられたメイポールを中心に、先端に結びつけられたリボンの端を、それぞれに持って廻り込み、くぐり、輪舞する女生徒たちーー　その中に、ラビニア、ジェシー、ガートルードの顔が捕えられる。

× × ×

三々五々、囲む町の人々ーー

満足気に見守っているミンチンーー

× × ×

踊りの中で、はっと一方を見て立停るアーメンガードと、ロッティ。

見守っていたセーラ、無言で歩き出す。

28 スクエア広場の中

立尽して、離れたセーラを見送っていたアーメンガードとロッティ、ドンと背後から突き飛ばされる――ジェシーとガートルード。

ジェシー「とまってないでよ！」

ガートルード「リボンがこんがらがっちゃうじゃないの！」

半ベソで踊り出すアーメンガードとロッティ――

29 コベントガーデン市場

――やっちゃ場的喧燥。

30

同・野菜商の店の前

店番のピーターが、野菜を山に詰めた買物篭をドンとセーラに渡す。

ピーター「へい、お待ち遠……生憎、今日は店番頼まれちゃってさ。品物持って送ってあげられないけど、その分思い切りお負けしといたからね」

セーラ「有難う、ピーター……忙がしそうね」

ピーター「ああ、今朝からパンかじるヒマもないのさ」

セーラ「まあ……」

一方で客の声——

声「ピーター、こいつを計ってくれ！」

ピーター「へい、毎度ォ……」

ピーター、その客の方へ行く——

微笑で見送ったセーラ、重い買物篭を両手で持ち上げる

31 道

――

買物の篭を両手で重そうに提げ、休み休み運んで来るセーラ――立停る。

着飾った親子連れが、セーラを見て軽蔑したような眼を残しすれ違って行く。

セーラ、また運び出す。

32 ある家の前

野菜の篭を、重そうに両手で抱えて来るセーラ、よろめいて、思わず、その篭を地べたにおろしてしまう。

額に片手をあて、ふわっとよろめいて、家の前の鉄柵に、つかまる――

セーラのM「おなかがすくと、眼が廻るって、本当の事だったんだわ……」

セーラ、ふと鉄柵の下を見る。

×　　×　　×

路面から、鉄柵ごしに見おろす地下の部屋で――　セーラと同年位の着飾った女の子が、鏡に向っておめかししている。

その脇で、母親に上衣を着せて貰っている五才位の少年。

×　　×　　×

セーラのM「今日は、五月のお祭りで、みんな家族とお出掛けするのね」

×　　×　　×

地下室で――　おめかしを終えたその女の子が、パッと奥へ走るのが見える。

気づいた男の子が追う――

33

同・玄関前

ふと――玄関から巻きジュータンを拡げながら出て来た召使い二人が、そのジュータンをスルスルと伸ばしながら、セーラの前を横切って、表に停っている馬車の乗り口まで敷きはじめる。

セーラ、行手を遮切られた形で立尽す。

その時、玄関から跳びはねるように現われた先刻の女の子が、敷かれたジュータンの上を馬車の乗り口へ――乗り込んだ女の子が、馬車の窓から顔を出し、玄関へ呼ぶ。

女の子「ドナルド、早く！」

玄関から、先刻の男の子が、跳びはねるように現われ、ジュータンの石段部分から舗道部分へ、ポンと飛び降りる。

一瞬、男の子ドナルドの眼が、立尽しているセーラと会い、不審そうに見直す。
ボロ靴——　細い脚——　つぎの当ったスカート——
野菜の篭——　そして蒼白いセーラの顔——
ドナルド、怪訝にセーラに近づく。

ドナルド「キミ……野菜売りなの？」
セーラ「え……？」
ドナルド「顔が青いけど、なにも食べてないんだね」
セーラ「い、いえ……」
ドナルド、急いでポケットを探ると、コイン（六ペンス銀貨）を出す。
ドナルド「さ、これをあげるよ。なにか買って食べるといいよ」
セーラ「そ、そんな……御親切は嬉しいんですけど、ほんとうによろしいんです」
ドナルド「駄目だよ、受取ってくれなくては……さ」

ドナルド、セーラの手にコインを押しつける。

×　　×　　×

馬車の窓から、怪訝に見ている姉のノラ。

×　　×　　×

セーラ「（困惑して受取る）す、すみません」

ドナルド「（微笑）いいんだよ……君みたいな可哀想な人には、親切にしてあげるようにって、ママに教わったんだ」

声　「ドナルド……」

玄関から、外出姿の母親が出て来る。

ドナルド「あ、ママ……」

母親、近づくと、ドナルドに対していたセーラに、微笑で会釈。セーラも会釈。

母親「さ、五月祭り（メイポール）に遅れますよ」

ドナルド「うん、ママ……」

母親とドナルド、ジュータンの上を馬車の乗車口へ——

乗り込んだ馬車が走り出す――
待っていた召使いが、再びジューターンを捲きながら、玄関へ入って行く。
茫然と馬車を見送って立尽すセーラ、眼を落し、掌のコインをみつめる。
――遠く走り去る馬車。

34 走るその馬車の中

ドナルドの姉ジャネットが、対座した母親と話している。

ジャネット「ね、ママ……ドナルドったら、先刻ママから戴いた六ペンス銀貨を、あの女の子におめぐみしてしまったのよ」

母　親「まあ、あの子に……?」

ジャネットの脇で、後部窓からセーラの方を見ていたドナルドが、振返り、坐り直す――

ドナルド「だって、ママ。あの子、ママがお話してくれたマッチ売りの少女の子にそっくりだったんだよ」

35

ドナルドのイメージ

雪の街角で佇むセーラそっくりのマッチ売りの少女——

ドナルドの声「服も、靴もボロボロだし、顔だって青くてもう何日もなにも食べてないみたいにやせてるんだ。だから、ボク、童話に出て来る親切な人みたいに、六ペンスあげたんだよ」

36

走る馬車の中

母　親「（微笑）まあ、そうだったの」

ジャネット「でも、ママ、あの子は、野菜売りの子なんかじゃないわ。

もっとちゃんとしたしつけを受けている子だわ」
ドナルド「どうして？」
ジャネット「だって、御親切は嬉しいのですけど、ほんとうによろしいんですって一度断ったのよ。野菜を売ったり、お金を貰って歩く子が、そんな丁寧な云い方をする筈がないわ」
母親「そうね……私もチラリと見たけど、とても上品で賢こそうな顔をした子だったわ……着ているものさえ変れば、お嬢様と呼ばれてもおかしくないくらい」
ドナルド「じゃ、あの子は、ほんとは昔、お嬢さんだったの？」
母親「かも知れないわね……（後方を気にする）」

37 家の前

立尽しているセーラ、銀貨から顔をあげる
セーラのＭ「私はとうとう、他人からお金をめぐんで頂くようになっ

てしまったのだわ」

38 道

重い野菜篭を抱えてトボトボ行くセーラ。

セーラのM「そうよ、今の私は、それほどみすぼらしい女の子に見えているのよ」

39 セントポール寺院の前（回想・冬）

父親から銀貨を受け取り、ボロ帽子を突出す貧しい男の子（ドナルド位）に与える赤い毛皮コートのセーラ

セーラのM「私はもう、お父様にお願いしては、可哀想な人たちにおめぐみしていた、あの時の私ではないのよ。おめぐみを受ける私なのよ」

40 歩くセーラ

——その眼から屈辱の涙が溢れ出ている。

41 ミンチン学院前のスクエア広場の中

生徒たちの拍手——の中を、進み出たラビニアにミンチンが、サンザシの花枝の冠を頭に飾る。

ミンチン「さ、皆さん、今年の五月のクィーンに択ばれたラビニアさんに、拍手致しましょう！」

一斉に拍手する女生徒と、オルガンを弾くアメリア

得意気に一同に手を振って応えるラビニア

× × ×

その広場脇の道を——涙の顔で通って行くセーラ。無論、広場を見ようとはしない。

42

同・屋根裏部屋（夜）

じっと銀貨をみつめてベッドに掛けているセーラ。

セーラのN「お金をめぐんでくれたあの男の子への感謝の気持とは別に、私の胸は、深い悲しみに張り裂けそうでした。そうです……昔の私から今の私に変ってしまった、その運命の悲しさが胸の中に衝き上げて来たのです……」

——わっとベッドに泣き伏し、慟哭するセーラ。

（第十八話　終）